

「神谷美恵子の世界」を読み終えた。神谷美恵子は、「生きがいについて」、「人間をみつめて」、「こころの旅」等の著者であり、19才の学生時代のハンセン病療養所訪問で大きな衝撃を受け、「病人が私を待っている！」と27才から医学を学び、精神科医としてハンセン病の方々の医療に携わった人として、よく知られている。

私は「こころの旅」の初版（1974）を読んで以来、自称：神谷美恵子の隠れファンである。どこに、魅力を感じるかといえば、とにもかくにも、「生きていること、そして人間であることを見つめ」続け、かつ実践したその生き方の真摯さ、直向きさである。

この度の本は、アルバムや詩、講演録、そして、知人、友人、後輩、同僚等が、神谷美恵子を語る寄稿文で構成されていた。改めて、神谷美恵子の足跡や思索の奥深さを改めて知ることができた。

日本赤十字看護大学：川島みどりは寄稿文の中で、「看護本来の姿は、たとえ、現代医学では治癒困難な場合でも、また障害の程度や高齢の如何にかかわらず、対象となる人々がより人間らしく、その人らしく生きていくことが可能となるように支援することである。」と述べ、「新しい設備や装置や機械によって省けるエネルギーは、あくまで看護師さんの『人間らしさ』を保つために用いて欲しい。看護師さんこそ医療における人間らしさの最後の砦である」という神谷美恵子の言葉を引用しつつ、神谷美恵子の患者に向き合う姿は、「医師というより、看護師観に近かった」という。また、患者の前で戸惑う若い看護師に「もっと自信をもっていいのよ。あなたたちは患者のそばに存在するだけでも意味があるのだから」という神谷美恵子のこころのつぶやきを伝えたいという。

私は、今「緩和ケア“虹”」の活動に少し係わっているが、こうした看護師観で利用者に寄り添う看護師さんたちの姿を拝見できることは、大変恵まれていることと改めて思った。

「自らの生きる姿を模範として示すことができるのが最高の教師」という表現があるが、神谷美恵子はもちろんのこと、緩和ケア“虹”の看護師さんたちの姿からも、多くを教えていただきたいと思っている。